



























2025年6月28日から7月13日まで、茨木市福祉文化会館全館を会場に開催された「ICAW: Ibaraki Contemporary Art Weeks」において、わたしは2階の一室を使用し、壁や天井、床、窓に至るまで、空間全体を絵画として構成する公開制作を行った。普段はキャンパスに油彩やアクリル、マスキングテープなどを用いた抽象絵画を制作しているのだが、なぜ本展では「部屋そのものを絵画」として捉える試みに至ったのか。その背景には、この会場が翌年に解体を控えているという事情がある。

会場の下見の際、わたしに割り当てられたのは、昭和の面影を残したやや癖のある空間だった。単に絵画作品を展示するだけではこの場の空気感を活かしきれないと感じると同時にいずれ取り壊される運命にあるからこそ、制約から解放された展示ができるのではないかという直感があった。その瞬間、空間全体をキャンパスに見立て、この時にしか出会えない絵をこの場所に直接刻み込みたいという衝動が湧き上がった。わたしは茨木市の担当職員にその構想を相談し、部屋全体の使用を提案したところ、幸いにも快諾を得て実現に至った。

こうして始まった公開制作は、自分にとってはこれまでにない規模の挑戦であったにもかかわらず、不思議と身構えることなく自然体のまま制作に臨むことができた。筆跡は壁から天井へ、さらに床へと広がり、空間全体が呼吸するように変化していった。

ある日、いつものように脚立に登り、天井へ筆を走らせていたとき、茨木市文化振興財団の田中勇輝氏が、国立国際美術館学芸員の福元崇志氏を伴って会場を訪れた。筆を止めて脚立から降りたわたしに挨拶を済ませたあと、福元氏はこう語りかけた。「9月に同じ会館で開催予定の自分のキュレーションによる展覧会『ライフライン』に参加し、隣室に続かなかちで制作を行ってほしい」。これまでの取り組みを発展させる新たな機会になると感じたわたしは、その場で参加を引き受けた。前置きが長くなったが、以上が本展「ライフライン」に参加することになった経緯である。

「ライフライン」展では、「ICAW」で制作した部屋の隣にある、より広い空間を使用した。9月から会場に入り、まず前作の部屋と新しい部屋を隔てる壁に黒の塗料を走らせた。二度目の試みであったこともあり、筆の動きはより自然に、勢いを増していった。前回と同様に事前の構想を持たず、現場で一筆ずつ色面や線を重ねながら、絵画と空間、そして窓から差し込む光と対話を続けた。絵の内と外、そして公開制作に立ち会う鑑賞者のまなざしが溶け合い、互いに包み、包まれ合うような関係が生まれていく。展覧会最終日の前日、

仕上げの段階で、最後まで何色を塗るか決めかねていた箇所があった。隣の部屋から歩きながらその色を思索していたとき、ふと、最初に塗りはじめた黒の行き着く先がまだないことに気づいた。「そうか、最初の黒が最後を締める」。その瞬間、すべてがひとつにつながったのである。

「ライフライン」という言葉には、電気や水道、通信といった社会的インフラを超えた意味の広がりがある。それは、生きるために目に見えないかたちで張り巡らされた連続と循環であり、人と世界を二項対立的に分ける境界ではない、両者を結ぶ「縁」のようなものがイメージとして浮かぶ。わたしにとって、それは呼吸のように「吸う」と「吐く」を繰り返しながらひとつになり、この世界とのつながりを保つものでもある。その自覚のもとでわたしは、「主観」と「客観」が対立する以前の両者が未分化な状態、すなわち思慮や判断を介さない「あるがままの経験」に可能性を見ている。描くという行為も、絵画も、空間も、光も、時間も、鑑賞者も、そのいずれかが主役になるのではなく、互いに包みつつ包まれ、包まれつつ包む関係のなかにある。その呼吸の中で、絵画は「生」としてのつながりを紡ぎ出し、一つの「ライフライン」として生成し続けているのである。

中屋敷智生







